

アクティブ・ラーニングとしての対話活動 —学習形態が児童の認知的理解に及ぼす影響—

菅井 篤 (開智学園)

キーワード：アクティブ・ラーニング，対話活動，学習形態

問題と目的

有元 (1989) と上野 (1990) の報告した，学校での学習内容を自らの日常の実践へと関連づけていくことができない学校教育特有の問題について，菅井 (2017) は有元と上野の調査を参考に，学校での児童の問題解決過程に対話活動を取り入れることは学習内容を自らの日常の実践へと関連づけることに影響するのか，という点を実証的に検討した。菅井は，問題解決過程で対話活動を取り入れたことによって日常の実践への関連づけに大きな影響があったことを示し，対話活動によって生じた他者とのインタラクションが，児童の学習に質的な変容をもたらしたことを報告した。

しかし，菅井の調査では，問題解決過程における対話活動の有無の差を比較したに過ぎず，対話活動の質的な側面については検討されていない。児童が日常の実践へ関連づけていくためには，対話活動の質的な側面に着目した学習法が検討されることが望ましい。そこで本研究では，児童の対話活動にアクティブ・ラーニングとしてグループ活動を取り入れ，その影響について検討を行う。

方 法

2016 年 3 月，神奈川県内の私立小学校 3 年生 2 学級を自由対話群 37 名とグループ対話群 39 名に分類し調査を実施した。学校と日常との関連づけを測るための課題問題として，有元と上野の調査を参考に，かけ算の文章問題 10 問を採用した。10 問のうち，5 問は日常の実践へと関連づけが可能な，いわゆる適正な文章問題であり，残りの 5 問のうち 2 問は計算したとしても何の意味も持たないような問題，或いは計算の意味を持つ状況を探しにくい問題であった。また，他の 2 問はありえない条件や前提を持つために日常的な実践的感觉から外れた問題であり，残りの 1 問は正答を導くための条件が文章問題内に揃っていない問題

であった。これら「無意味問題」「非現実的の数値問題」「条件不備問題」の日常の実践への関連づけができないと判断される問題が，10 問中 5 問を構成した。これらの文章問題 10 問は順序不同であり，文章問題 10 問のうち，問 2 と問 8 が「無意味問題」であった。また，問 6 と問 10 が「非現実的の数値問題」であり，問 7 が「条件不備問題」であった。

自由対話群の児童 37 名へは，離席し自由に対話してもよいことを学級担任が教示し，調査を実施した。机の配置は講義形式であったが，休み時間のように対話と離席に制限がない学習形態とした。グループ対話群の児童 39 名へは給食や清掃などの活動を日常的に共にする 5 名或いは 6 名の班ごとに対話をしながらグループ活動で取り組むように学級担任が教示し，調査が実施された。グループ対話群の児童は，児童同士が班ごとに机を向かい合わせる配置で，着席しながら課題問題へ取り組む学習形態であった。調査は対象校の 20 分間の休み時間帯に実施され，同一時間内での解答内容を比較するため，解答の制限時間を設けた。文章問題の数と内容から検討し，15 分で解答を打ち切ることとした。

結果と考察

分析では，日常の実践への関連づけができない課題問題について，文章問題の非日常性を指摘して解答ができないと答えていることを，関連づけができているとみなし比較した。その結果，自由対話群がグループ対話群より日常の実践へ関連づけながら問題解決を図ることが確認された (Table 1)。対話活動においてアクティブ・ラーニングとしてグループ活動を取り入れることで，児童の学習に質的な変容がもたられることが示された。対話活動においては児童の主体性に併せて，教師が共に学習環境をデザインしていくことが必要であると捉えられる。

Table 1 学習形態 (自由活動群－講義群) 別に見た児童の解答 (単位 児童数)

	n	無意味問題				非現実的の数値問題				条件不備問題	
		問 2		問 8		問 6		問 10		問 7	
		指摘あり	指摘なし	指摘あり	指摘なし	指摘あり	指摘なし	指摘あり	指摘なし	指摘あり	指摘なし
自由群	37	3	34	5	32	5	32	5	32	21	16
グループ群	39	11	28	12	27	13	26	20	19	23	16
χ^2 値		5.10*		3.26†		4.13*		12.27**		.04	

** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$